

蟲賣

ふも、さすがにおそろしくおぼえ給ひければ、たちどころ、あそこをのごとくせみこゑにの給ふこゑのいみじうをかしかければ、人々にげさわぎで、わらひぬれば、略○下

〔嬉遊笑覽禽十二〕むかしは虫を商ふ者などは、なかりしなり、貞享四年日記、六月十三日、きりくす商賣いたし候者相尋候町々、覺四谷麴町、本郷湯島神田すだ町二丁目相尋候處、一人も見え不申とあり、そのころ、さるもの、あらんとおぼしき處を尋ねしなり、

〔大和本草十四〕螢ホタル火ル○中 大小二種アリ、山中ノ川ノ邊ニ多シ、勢田宇治ニハ螢火多クシテ賣之、

賣螢火事、和漢メヅラシ、

〔守貞漫稿六〕生業略○圖 螢ヲ第一トシ、蟋蟀、松虫、鈴虫、轡虫、玉虫、蛸等、聲ヲ賞スル者ヲ賣ル、虫籠

ノ製、京坂籠也、江戸精製、扇形船形等種々ノ籠ヲ用フ、蓋虫ウリハ專ラ此屋體ヲ路傍ニ居テ賣也、巡リ賣コトヲ稀トス、秋季ニハ當季ノ商人夏冬ノ如ク多カラズ、

〔閑田次筆四〕南都の人の話に、松虫鈴虫を捉ふるに、挑灯を携へて夜行けば、其光をとめて飛來るといふは、むかしの玄わざにて、今わがあたりにて虫を賣ものは、竹を二本もちて晝行、薄を押分れば、虫ども驚きて飛出るを捉ふ、又點智者は薄を根こして吾庭に植ゆ、摠じてかゝる虫は、薄の中に卵を残せば、ことしの卵來るとしの秋に至りて、かへりて聲をなす、吾庭にて生じたるをとりて、籠にこめて賣ればいと安し、春日野にて虫も捉、薄も根こせばよくえれりとなん、

〔倭名類聚抄十九〕龍力鍾反、和名太都 文字集略云、龍 四足五采、甚有神靈者也、白虎通云、鱗蟲三百六十六

而龍爲之長也、

〔箋注倭名類聚抄八〕按、太都、蓋爾雅所謂騰蛇、郭璞曰、能興雲霧而遊、其中者也、荀子云、騰蛇無足

而飛、說文、騰、神蛇也、今猶有太都在雲中垂尾者、越後海邊最多、謂之太都万岐、恐非龍也、

〔倭名類聚抄十九〕蚪音龍。文字集略云、蚪音龍之有角○有角、一本作无角、青色也、

龍